

# 武江年表

內務省圖書

第.....號

書部.....類

.....函

共.....冊

和書門

二	五	二	五
一	〇	五	五
二	七	五	五

類號函架冊

內務省圖書

二	五	二	五
一	〇	五	五
二	七	五	五

和

內閣文庫	
番號	和 25255
冊數	8 ( 1 )
函號	141 87

141-87





麗

武江年表

江戸書鋪

青藜閣

武江年表序

龍泉大阿之塞。於豐城也。藉

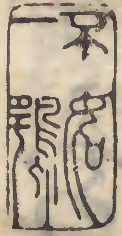
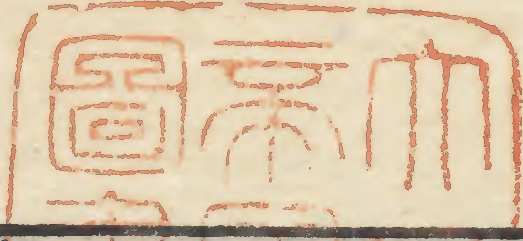
蔚紫之柔騰。誇斗牛之間。其

威靈如此。而終出於石函。且

雌雄似雜。以何頭悔。豈

聊。在哉。隆然其至。復也

匹於延平之津。則其可為知





正江年表序  
矣。其害一可益見矣。由是觀之。嚮  
似可怪者。即足泉阿之威  
需。取以傳于萬言。而不磨滅。而  
顯悔之取。關係為案大矣。豈翅  
多。何凡物之有。匹自有其  
數存焉。何桑受之失。得哉。  
友人齋藤月峯。寄所職之稿。

著書者。其千種。既行于世。今  
茲又著武江年表八卷。分  
為雌雄。先取其雄。四卷。持  
之。其為書也。自慶元鞞。韃  
迄于今日。大之。天災地妖。坊  
街之沿革。世態之遷流。物  
之權輿。事之興廢。小之。少



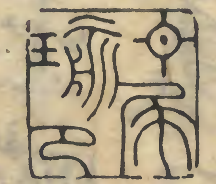
人之生率神佛之啓合龍及  
風謠仙談珍玩戲具。經羅  
不遺。攬按尤勦。凡二百年未  
之事。讀一注。一求。隨求隨  
在。族者。受其易。終而更無  
繼。豈無繼哉。事勢缺。掌操  
觚不苟。退待來日耳。其至

如泉阿復。匹。至。麟。捲。沙。彩  
光射波。見。生。美。可。全。見。矣。  
其功可愈。知矣。笑。別。此。編  
之。雄。鳴。以。待。來。日。者。亦。取。以  
地。雌。雄。相。匹。傳。于。今。古。而  
不。朽。也。與。其。何。憂。之。有。須  
日。剝。剝。發。先。卜。吉。仍。舊



貫乞方。朱亦不敢。薛便題  
蕪辭。以為延。平前。之。哥。云。  
嘉。永。二。年。屠。維。心。墨。云。月  
上。游。

前山陣人源瑜



七十若戰驅親鯨。依扇盤  
輿教太平。宮朝貶孫謀臣。列  
國日光高照海東城。  
試神劍。羅。并。牧。權。二。百。年。  
間不動兵。官家今日真無



事幾震高歌唱太平

四月十七日作二首

右二絶句若文化乙亥夏

日光宗廟弗忘之辰鵬齋亮田翁

之作手親筆取以贈先考也々取

以弁於卷首云

月岑志

撰要

○慶元より巨降降平の代光世亦被う教下の甚憂日不陪せり此故不  
遊兩僻境の人とりとも千里を遠くせむ厥後廉を看厥慶大と  
作くともて郷土の父祖の名所國會ありて浪親の琴と一治ふ余ら  
歳事記を繕て示存引と以再此輯をふ一村治聖壇のあり  
たあ武極華の梗葉を知りてむるの一助と以

○此編下載事所の中人以下の身月小解るとと久本一々地理の沿革  
或ら坊間の風俗事物乃梅葉ふまるとまて獲るふ瀧う遠く素より  
公迎乃御事の頃ひ初うたふあふいたぬく傳耳せり事も傳ふれ  
ありし漏せり

○是より素新地を撰て是決彦列臣の舊邸地を阻く不々播  
奇社氏屋も地を揚るる新小剗一或は幕後の書小器りて慶を  
異小するの類考ておふへううは起し見年ふあこ久ひて一二を











御入國の後不日行徳の鹽を江戸運送の爲波地より船の通徳を  
妨たごりぬるは是今の高橋の通ありとのり  
天文より元龜のころは徳のり小田原  
徳の年貢を納り波地には碑も築き

○八月平河天満宮 津城内梅林坂より 津城の北平河江に移さる

○夏津勢の与市せりて若狭親徳の辺  
津城の北平河江に移さる

風長義永紫一旗あり皆人取りてとて入る  
津城の北平河江に移さる

○四満山廣徳寺 今下谷 小田原より今年小田原滅亡の後江戸へ  
小あり

来り今の昌平橋の浪地を軍庫を営む  
此時の位持を希聖和尙といふ後  
津田頼りまより後賢永中今の

地 ○天正の頃軍庫を乱波風間とて強盗あり黨を結び陣中  
移り

忠心入て盜をまじ徳人忠心より今年より何とて逃避人  
おのり

絶たぎり  
如東八代記  
小あり

天正十九年 幸卯 正月四日

正月冥八洲の徳家兼首の津變として始り登 城ありと云

○十一月軍庫津附願の津赤平をのり ○赤坂二木町を移す  
きふりま

○十二月軍八州通用のつれ小大判小判を造りぬる  
は時代浪一投九令  
まゝおあつとつり

○小田原の靈鳳山神徳寺今年後町へ移り後赤坂一ツ木へ移る

文禄元年壬辰 十二月八日改元

津城の西北の北大法書組宛宅地をぬる六組小分あり一番とて

六書まての名山あり  
是より書町  
とつり

○田原山抄々願寺天正十八年小田原より西へ下りぬる今年

本館町の地寺寺院をぬる  
是より書町  
とつり

波地の高岩も次々ふり戸へうりまり若狭傾城町の軍人入在司志方より小田原を移す  
一其の子あり父果て後小田原落去ありは今年十一月大あり一商家の分地  
まはすより西原のめよりちあて居候りつらげ波長の後傾城町軍基のつをぬる







新のて候た ○今年米穀豊饒あり

○小田系不老山壽松院今年凶地小粒させしれ今の振治橋の凶小  
と流をぬくる候年神田柳系の辺へ移り又後系へ移る

文禄元年乙未

武蔵小別藏光次と書書以武蔵と ○小田系常知山本誓寺江戸小粒

ぬひ日以いひ管攝所町の辺に地をぬくる候る管町の辺へ移り天和二年

の候今の地へ移る ○芝又長見安集云云舟町と日市のおひふちひ

さた橋只一ッあり是ハ渡渡の橋あり文禄二年夏のおひふ橋のり

ぬくの残籠せふを始かめぬと水糸結むすりち交りてあり

官府へさしあへり交りては橋を残籠橋といふとありあるは日市町

兼日市町ハ今の残りの橋のあり小島一橋あるハ

慶長元年丙申

七月間 土月二十七日改元

一歩并小別金給て通用芝又長見 ○六月十二日系原畿内軍東法大

羅又水免階むら ○同七月朝鮮人乗艘 ○同十二日大地震月と途々

止に ○渡河基を築くる ○多田宗玄といふ人靈告れいこうを言ひて京都

東山の辺より某所像を拵りて本庄に安んず今の多田の某所あり

○税町常仙つねせんと常基つねもと実業師を安んず

同二年丁酉

新田小光原山感應寺せんたのあきひらと常割つねわり 屏山日感上人ありは女地不詳候と年

同三年戊戌

松平為後と駿州より江戸渡河基の下へ橋後實永十八家年小

○八月三縁山橋と寺日比谷より今の地へうつる寺ここら今のヤノ



谷町の方ありしとこの辺をひや町とりするむう八潮入の地より漁人海中不枝付の竹を並べ置く思の入るを妨ぐあることなきをひびといふ字あり今も海苔をとるふいこを川ひびひききをおりの住居の地あるひびや下といひ後世はふらうのききてもひびや町と号しけらる後り世にありしを新青町と改む町中町もい無地ありしと後い泉養寺宗創 ○十月令風山高林と後河原を於て宗創あり後年約止去お店へ移る

慶長己年己亥

二月四

二月令別山龍室天 神田産尔軍創 寛永十二年 浅原新堀へ移る

寛永より寛永のりりて別山龍室のり浅原をより遠ありけりりて大とすと撰ひ十ふく一二を志しその時ありふたふりり

同又年庚子

小判小光次と書書せしを極中二つに改しる 光次の龍室 ○六郷掃再樹七再

○始て宗が不徳月代を重る ○池上本門の大塔建立 翌年ふりり 全く成然也

同六年辛丑

十一月四

八月大小判杖銀の形制を定めぬ 渡河江戸 大忌銀もけ時より幣る

○貞観政要板成 孔子家語武經七書板行せしめぬ 河津世以来の刻本

○安南始て奉書寛永九年まへ通洛而絶 東埔塞始て奉書寛永永

己年の后絶るふり安南始て奉書寛永十八年迄今年より寛永永

まへ二十二年のり済朱中船とて我をく商人亞馬港ノヒスハニ還環安

南呂宋木の國く小年毎不行て六高賣し此亦も私ふりり高小

奉年く不絶とやり 以上奉慶親 疾而載

○十月十六日大地震房総の山を崩し海を埋立と波又海上俄り潮

引る二十餘町行濁と成る十七日潮大山の如く卷上流死駁し

○十一月二日己の刻後河町中より悪疫より火をかひ此大焼亡不江戸町

一字も跡く人多く死す早荒町中早荒火事絶は序し皆











世時出遣當有一云

奉添金考云世時當の惣領植の本を以て遣ふに子孫ありて世時といふ

○大城津普徳子付柙町の三場津用比あり大の辺の遊女屋ともえ替

預ち前へつり○世時代遣ふ道橋多あり武家藩邸後移多

○南窓より夕日三番柙を渡り長崎より梅子場よりめて夕日を裁り

一夜天心中雲人  
お海ももりか

享和十一年 丙午

大城を築たぬか二月より始り九月に成就あり

この所が後世に渡り把後より大なる城となりて浦よりひらき

自ら兵糧の倉立てて蓄積を免れぬらまといり

○選置

一清書異物とも揚る波中の使もたす

の浪より高根あり

○大城築田

以上京産雜貨あり京産云田澤といふ國名不詳り一は番丹のありまうと云

○六十六州竹葉を結て枯る○本は馬清と三河稻新渡河を渡り後

ぬか○十二月八日永樂渡河停止漚より用ふ一は首日本橋をこれ

享和十三年

小倉氏康の時実東より永樂渡河を用ふ一と令せられびと幾と云ふより一は天下の一統となり二は元定て用ふあるも一は永樂一渡のうたり小びに足錢を面てきよき小舟のて管船をえらひ万民安んじたり今幸永樂を止めひし中永樂代記あり

同十二年 丁未 正月四

二月十二日より十六日まで、清城の事を観世金春勳進徳具行あり

同日同前よりか雲の神子も國勳進高舞妓具行あり

のまゝ山舟の骨董集ふ

○烟葉

一弘まの上下をきき

葉を吹きつけたりを吸ひて煙を吐きせしむるを紙巻せしむるの製法の論を

○通清園白伝平公清中向ありは所橋をよま母と改めひ歌をか

おのゝせむをいふこと一於考よりあつても事とまを



東の國より舟はりの船乃江戸より小川とひらの南田川あり

○同日朝鮮使節初来聘 正使長松吉副使 慶選筆丁好寛 ○八月八日客星現天

慶長十二年戊申

林道春先生清儒若小命せらるる世時と先生没後五年

同十一年 己酉

二月に日月の容方ありて現る 皇幸代界小方形 月出満没如斎

○二月島津侯琉球を征して中山王尚寧を將ひて

○八月阿蘇院始々入貢奉書 唐船始々来

○相草所創集 一説元和元 年とあり ○秋品川海防船為山陰より海防まゝ二十

乃所乃送幅を度けりて海防自はせりてあり

同十八年 庚戌

二月 閏

芝愛宕権現本社拜殿閣門石階未法建立 田福もこの時建立と云和二年の丙辰 紀伊小島よりこの綱ありと云り

○銀町不知足院再建立 後村院の 旧名あり

○七月十九日勅して榜上寺十二世貞蓮社源卷上人一普光親智坐所の

号を改め○八月琉球始々發府并江戸 所城へ入貢王尚寧来聘

○官醫吉田宗物卒 其子宗達又良医のゆゑあり大橋宗桂 も宗物より男あり其墓圖式一巻を著し

同十六年 辛亥

正月二日毫口蒲生彦彦藩火火中門外仙人罹漢の彫物ありて災

ありしと世時焼くると○琉球聘使来 ○京より外耶蘇宗再發

○龍徳山雲光院阿蘇馬建立 了喰町の 塔あり ○六月廿二日加藤孫肥後を法正率

○官醫の養安流正理卒 四十七才金翁と号山城守の人あり曲直原及之の門人ふ 一々作の姓を冒せ其長十年江戸に居て官医也

あり後傳を嫡子正田小浪と河在小浪居也



慶長十七年壬子

十月四

亞馬港即亞あまうらよりめく奉書まがき元和七年と新伴西把弥にいすせみ始く奉書まがきとのちあり○七月廿四日大敵降○大を造る傍茶同於誅せしむ管帳を好む  
辻切をよび

同十八年 癸丑

漢又刺亞始く奉書○六月七日津田社比とまを南傳る町始く津旅あり○九月千葉家後統国分を傍心務とり人先祖お傳乃捺相を本津前へ寄進せしむ○十二月耶蘇宗の老漢系お終く誅せしむ海軍元を敵の迎へて以の刑服賜ありは西の橋  
今も墓内橋といひ八月十二日を今もまつり  
あり

同十九年 甲寅

郡沼道園あまのうら 辰谷海野高たけののり 又小隨つと始ていすへり此の世あり廿九女の附犯州  
後の指さしより犯州へり

○八月廿八日東刻大風揚上寺山門惣破り山門倒る人家家損も品川九品も入重の塔倒る又安二両家奉儀就せしむあり百六十九年を經く滅せしむ一人安の集る同人のこゝより九品も奉儀妙必と  
いふ一安の集る同人の

○九月南蠻人阿素陀人東朝あそだ 此の時ありヤウアスとあり一地西ヤウ海軍六千をふゆあり一か友町とあり

○十月孝長貝父集減しんせう 寫奉十冊 編者三浦清人ハハ東家おはし一十二冊あり永享以來孝長寛永との集記ありけうち東家代の本を抄録せるを永享代記と題して刊行  
中津の抄録を孝長貝父集と題しこの孝長貝父集を抄録して刊行せるを孝長  
あり

山年問記事

左記を而後の子孫多の孝長集を抄録す























元和四年戊午

三月間

二月後事あり

河津津邊あり

今の津邊郡の  
辺あり

○日本橋津邊

○河津の辺より火標田迄焼爰○十月宴の刻長雲公 慧星公

○月白の勅書津再建十一面觀世音を安んずる東雲山形長谷寺と

あらしむ 中真定山秀  
兼修心あり

同又 辛巳未

夏より冬までありて毎夜白氣を東南の角の如く長數十丈又  
慧星を東南の角の如く火柱の如く

○又月より八月まで大旱又穀也く人死る多く死に

○大坂津を書始 ○長谷川長安の久保八幡宮境内あり

時 鐘室刻後 延室中甚切也く福 ○九月十二日輝高先生卒

九十元門入林道春先生のいふも史なり名波乃田誓心云  
夏永得善松永昌三宅界 齊よりんこの世小はひ

同六年庚申

十二月間

後粟山普門院陽田川の辺より飛戸村に移る ○二月十二日後友代

光亨の卒 九十二

○十一月二日坊より中真親智圓作入寂 七十七歳

○後津津邊始りて建 ○日本橋を築せしむ 其除のめふ築せしむ  
なり日本橋の法度

世多作多か来く友小志ら名つらるる或ハ  
百般六十般日ありて名く友ともて作あり

同七年辛酉

二月親世を一代能具行を揚新東洋

○九月廿二日小堀遠州侯上京後長谷寺の友友を建するの儀とて津邊

川の舟より酒舟を築ふと送る事あり

為り来んとちたるとわたり人等こころをなせのたしめあり



○十二月十二日織田有樂兵衛卒

七十才恒居の町をえ敷新屋町と云  
今不あり有樂兵衛恒居あり一故之

元和八年壬戌

活所遺稿

壬戌元日遇雪

雪隨世事正紛々 閑座牕間東武春 諸葛青蓮開隻眼

笑而不答當時人

○十一月源通村に軍を出下向あり活紀行を寫す海邊記とあり

十一月十六日

活紀行を寫す海邊記とあり

同九年癸亥 八月岡

正八明の復遠障那統邑捨動源をより小親を名をのこ字を書き

歌を掲ぐる○正月又日智彦白道情隨意と人寂

七十にやと人を世の情を  
の弄物あり後人そふる

○芝居上り山門津再建

○十一月十六日幕作本因坊日海寂

世年間記事

女奇行妓を捕せしれ男奇行妓とあり

○奉祈一月とあり葛西まき船通一々二三に又の船を掛

寛永元年甲子 二月晦日改元

停勢停難官より長官おに市奴大村ををい戸日本橋通三行

○長徳法印靈叟を感一永代高小八幡宮を勅修と回八年再

代地 延喜



真あり ○日里村正初堂の再建 ○浮西把孫重復

○東叡山寛永氷より所建立関山慈眼大原あり 幸海会考ふは地は後堂を建

為中前の地は後堂の所あり一畝五段をさくく上段をさくくを思ふくと所を  
のみ留へり一畝五段の地の名をさくくを思ふくと所を  
あり一畝をばけ今の地は後堂の又比叡山坂中の  
名をさくく一畝五段の町を坂中町と号す

○道平山靈巖の築削 は時今云是巖高の地は権登又巖上人地  
を以て地邊を本治く建立あり一畝五段

○明志安助寄石撰と号し はツ言権町とく時天六日具行  
角力の地

○二月十五日より中橋より於て中村勅之助奇為娘と号  
は時橋より一畝五段  
是れ大分寺あり

○十月十五日小柄系惣持権現社改の扉より於て二子現は二日あり  
は時列島田原  
は時列島田原

○十二月朝野人素勝 正使通政を文野立副使通  
列を夏美弘重治事幸治榮

寛永二年乙丑

陽高小幡祥院創立 是れ山前妙心渭川劉和尚この時ハ教慈山天沢と云寛永十一年  
癸卯九月十日通玄あり後二位  
禪祥院に開り大姉と号す

○南八丁堀一丁目あり は時を後  
は時を後

○八月猪神一堀大工のり は時を後  
は時を後

○二月寺小宮あり

同二年丙寅 巳月團

○戸天満文鎮座 寛永より今の戸天満一寺の社  
遺堂はもと大寺居氏神社の切あり

○二月より八月は法皇昇殿 ○二重津城湯在書始り







○正月廿日 柳堂小於く御連舟會あり

足は飯田連舟會の始りありと云

○五月廿二日入道正覺寺開山慶育禪師寂

二夜忌禱ありありと云

○一乃流小野派劍祖小野次郎大進門卒云

親友の人にて孫子上敷指中りり

○十二月十日官運今大略道二率

ハ十二日

○所く辻斬り云○十二月麻名池元

小居云 冥途下向の記ありて此の句 むきし時、若ころとてはぬ上の雲

寛永六年 己巳 二月國

六月上旬より同忌村石初等快於流枕さるるよりあり像并

江戸中老より男女群集云○七月廿七日玉室澤庵のよき像を

流さるは菴の羽衣上の山玉室の奥に擲舎之類く

候ありて玉室は月流菴の二所流罪せらるるべかりしとありては月はあこめ

候上菴一偶を  
と別を告て曰

天分南北兩見飛 何日舊栖同翼帰 聚散無常只如此

世情禽亦有樞機

玉室額を和て云

草鞋竹杖與雲飛 舊院何時把手帰 水遠山長猶絶信

別離今日已忘機

八月十五日は菴完上小居云

完と川子流并月山流さきて若くは世よすむひ日ありは菴

あひまきるこよひの月をむちののむちの松のうけふらんらん

二所流罪のゆゑ一はは菴和尙と備を云て  
あるべしこの所 仙洞の内うこり

さるるゆかりの流も玉の流もあつてのつらむらり



いころ民名のねり小

江戸味増を二まのすりてつむりのみそをまろりのころ正月

○今年より武家くは書を並る場もよ於ては斬あり一取とそ

寛永七年 庚午

正月八日隅田川あて

古塚のまろ一杉柳のあつらひさまろもむ首一も鹿 持時が佐

○二月十日日醫原甲斐通奉率 百十七やうのまろを後り一や件  
夏武彦のろをまろあつらひの  
徳平一後十六清くあつらひ  
とろ著述の医を柳花をまろ

○二月小湊誕生寺あり一布引祖作  
像身込事書さへうり  
二月二日身込久遠寺日蓮比と奉門寺

日樹宗瑞日樹信良版田小配流○六月琉球人來朝

○同廿二日大地震 陸○八月山王社法造營

○以徳親世喜之田の地小安並以 山法雲上人を茶の茶  
より勢をまろあつらひ

○十二月廿二日大地震時刻光為流行一と事よとまろり

同八年 辛未 十月閏

三月十九日江戸中不所降○同廿日諸国露降

○二月二日法華寺の堂上○去年より今年も六十尺皮膚癩瘡を病  
む者多し○東叡山小大佛像 造立あり  
場某廣泥を粘くそのゆじ  
こまを造り一めらう後事地巻

○十月十七日野大石焼落立 依る大橋亮務之と  
彫り言一丈八尺余

○十月十日所降○十月十二日後後氏又代通奉率 八十才

○十月十七日野大石焼落立

○十月十七日野大石焼落立

同九年 壬申

諸家深秘録云今年より奥只仙臺の茶穀始まる江戸一と今

江戸一と今







○平塚明社社神遊立秋不至之儀就其

○尚年より山王法衣を授けり大なる禮と成り

○室林山暮日必く頼町代地より田舎を去り

○七月琉球人來聘 正徳作敷子合衆よりあり 村山又二席世之居尊を町下

於て始るの儀 市村羽左衛門 ○八月八日或る夏の法衣の室 おん人の世

齒をあらわすに終る今日終り おん人の世 齋をあらわすに終る今日終り おん人の世

馬より若衆を祈り おん人の世 祈り おん人の世

○明人安針 後池の 江戸日本橋安針町をあらり又お州三浦逸見村を

願も其妻妙満尼今年七月十六日終り おん人の世 願も其妻妙満尼今年七月十六日終り おん人の世

安針の忌日 おん人の世 安針の忌日 おん人の世

寛永十二年乙亥

正月廿五日寅卯刻大地震平末刻又地震あり ○後府内を震動

○春鳥丸大納言光彦 おん人の世 春鳥丸大納言光彦 おん人の世

又源通村 おん人の世 又源通村 おん人の世

春 おん人の世 春 おん人の世

○安宅丸の舟船修置より来り 一旗小寛永十一年とも云 安宅丸の舟船修置より来り 一旗小寛永十一年とも云

○二月天台院 おん人の世 二月天台院 おん人の世

○六月十二日大風遠呂豆丹海海の船八百艘破損 おん人の世

○七月天 おん人の世 七月天 おん人の世

○八月廿日 おん人の世 八月廿日 おん人の世

○八月廿日 おん人の世 八月廿日 おん人の世

○八月廿日 おん人の世 八月廿日 おん人の世







海内の人心皆安んずる

○十二月朝鮮人來聘

正俊白藤任統副使東瀛令世深  
從幸青丘芝床 張版亦替古之



武宗皇帝表卷之二 畢



